

〈研究ノート〉

小学校「総合的な学習の時間」の指導の充実を考える ——単元の指導計画の分析と実践の分析から実践化へのポイントを探る——

石橋桂子

抄 録

本稿は、小学校「総合的な学習の時間」の実践に焦点をあて、指導法についてまとめた研究ノートである。総合的な学習の時間については、教職課程においても新たに「総合的な学習の時間の指導法」が必修化されるなど注目されているが、小学校の現場では、指導計画や指導法が十分に確立されているとは言いがたい。そこで、筆者が優れていると判断した単元の指導計画からその価値を捉え解説することにより、総合的な学習の時間が目指す特質を明らかにしたいと考えた。

また、研修会での発表資料と授業実践者との対話から得られた実践への知見を「対談」として記述しながら、この時間の理論と実践をつなぐ方策を導き、指導法の充実を考えていく。

キーワード：小学校総合的な学習の時間の実践、単元の指導計画、小学校総合的な学習の時間が目指す特質、理論と実践をつなぐ方策

1 はじめに

小学校「総合的な学習の時間」の実践は難しいと言われている。その理由は、

- (1) 教科書がないこと
- (2) 学習材を教師が自分たちで探さなければならないこと
- (3) 児童主体の学習を目指すため、学習や指導の道筋がはじめから見えているわけではないこと
- (4) 児童主体とはいえ、教師の適切な指導やタイミングのよい指導の出場が重要なこと等々、をあげることができる。

このような課題の解決のためには、改めて「総合的な学習の時間」が持つ特質を実践から明らかにすること、授業者の配慮や実践の中で生まれたできごと等を聞き取り明らかにすることで、総合的な学習の時間の理論と実践をつなぐ方策が探れるのではないかと考えた。

2 小学校「総合的な学習の時間」の指導法研究

(1) 本研究の目標

総合的な学習の時間の学習を質的に高める指導法の手立てを明らかにする。

(2) 本研究の課題

- ① 単元の指導計画から指導者の意図を読み取り、「総合的な学習の時間」の特質と結びつけながら解説する。優れた指導計画のポイントを単元の指導計画から見いだす。
- ② 「総合的な学習の時間」の理論を具体的に実現しようとしている学習活動の場面や探究的な学習で見いだすことのできた児童の姿を捉えるために、実践者の研究発表資料と聞き取りから、筆者が実践の記録を対談形式でまとめる。
- ③ 総合的な学習の時間の学習活動を質的に高めるための方策を探る。

(3) 研究ノートの内容

- ① 記述された単元の指導計画から「総合的な学習の時間」の特質を読み取る。

i) 事例の紹介（引用部分 単元名，単元の目標，教材について）

探究の過程（スパイラル）を意識して指導を工夫した事例⁽¹⁾

○ 単元名「お米で広がるはくらの世界」第5学年 4～12月 45時間

○ 単元の目標

- ・体験活動と整理・分析活動を連動して協働的に活動することを通して、課題解決のための一連の学習を学び、米に対する自分なりの概念を形成することができる。 【知識及び技能】
- ・探究課題に対して多面的な視点から繰り返し関わりながら課題を発見したり、関連付けたり比較したりしながら整理・分析することができる。 【思考力、判断力、表現力等】
- ・米に関する自分なりの概念を形成するとともに自分の生活を振り返り、どうやって米と付き合っていくのかを考え実行することができる。 【学びに向かう力、人間性等】

○ 教材について

日本人にとって、歴史的に米飯は食生活で欠かせない存在である。しかし、近年の消費量や生産量は約50年前と比べて半減しており、稲作農家に至っては5分の1にまで減少している。

本単元では、「このままだと自分たちが大人になったときに稲作がもっと衰退してしまうかもしれない」という危機感のもとで学習を進める。ただし稲作を全く行っていない本校地域の実態を活かし、「お米の消費を増やすためには？」として稲作から漬物作りに学習活動を広げていく。そのために『体験活動を繰り返し行うこと』『体験活動を含めた情報の収集後は必ず整理・分析活動を行うこと』により、課題を更新しながら探究的な活動がスパイラルに発

展していくことに留意して学習を進めていく。また、「お米に合うとは何か」「自分にとって日本の食はどんな存在か」等の概念に関する問いを定期的に記していくことで、児童個々の学びの深まりを見ていくようにする。

ii) 紹介する事例（以下、本事例と記述する）の指導計画と解説

指導計画の部分は、筆者が解説を加えることができるよう、学習活動のまとまりで示す資料を作成した。資料は全部で6枚ある。1枚ずつの資料を見ていく前に、本稿で示す総合的な学習の時間の指導計画には、「探究の過程、学習活動、児童の思考、指導上の留意点、時数」が書かれていること、「探究の過程」「児童の思考」を記しているところが特に総合的な学習の時間の特徴であることに触れておきたい。

まず、「探究の過程」について確認する。「探究の過程」とは、「『課題の設定』、『情報の収集』、『整理・分析』、『まとめ・表現』の学習過程が繰り返される」⁽²⁾ ことである。つまり、「探究的な学習の過程を総合的な学習の時間の本質と捉え中心に据えること」⁽³⁾ 「探究的な学習とは、日常生活や社会生活に生起する複雑な問題について、その本質を探って見極めようとする学習のことであり、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動のことである。」⁽⁴⁾ ため、指導計画にこれを示すことが重要なのである。

次に「児童の思考」について確認する。「児童の思考」とは、その学習活動を行っているときに、児童がどのような思いや願いを持つか、どのようなことを考えながら活動しているのかを、教師が想像しながら記述したものである。児童の主体性を重視する総合的な学習の時間では極めて重要であるため、指導計画に記述しているのである。

[本事例の指導計画-1]

お米で広がる ぼくらの世界 (第5学年) 4~12月 4.5時間	探究 情報	○学習活動・児童の思考 ○単元に関わるアンケートを回答する。	指導上の留意点 ・グラフの読み取りについて、様々な比較を交えて数値の読み取りができるようにする。	3
	整理 課題	○アンケート結果と日本における米の各種データ(生産量・消費量・米農家数等)を整理・分析する。 ・男子と比べて女子はご飯が好きでなかったりあまり食べなかったりするね。 ・データを見ても1965年と比べて全ての数値で大きく減っているね。		
「このままだと自分たちが大人になった時に稲作がもっと衰退してしまうかもしれない。」という危機感のもとで学習を進める。	表現	・このままだと更に減少してお米がなくなるかもしれない。		

本事例では、単元のはじめから課題があるわけではないことが分かる。米に関わる学級児童へのアンケート、米の各種データ(生産量・消費量・米農家数等)の整理・分析から学習がスタートしている。総合的な学習の時間では、「はじめに課題ありき」ではない。探究的な学習

の過程は[①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析 ④まとめ・表現]の過程をおおよそ繰り返すのであるが、「いつも①~④が順序よく繰り返されるわけではなく、順番が前後することもあるし、一つの活動の中に複数のプロセスが一体化して同時に行われる場合もある。」⁽⁵⁾と解説書に説明されている。

「このままだと、自分たちが大人になったときに、稲作がもっと衰退してしまうかもしれない。」
 「お米の消費量を増やす取組を考えなければならない。」という危機感が児童の共通の課題となり、その意識を共有しながら学習が始まっていく。

[本事例の指導計画-2]

お米で広がる ぼくらの世界 (第5学年) 4~12月 4.5時間	課題	○まとめをもとに単元の課題を設定する。 <u>お米の消費を増やす取組を考えよう</u>	指導上の留意点 ・グループや全体で話をするだけでなく、多様な考えを引き出すとともに、様々な視点で話し合うことの実感を感ぜられるようにする。	5
	整理 課題	○各種データの読み取りをもとに第1の課題を設定する。 ・まずはお米の現状が分かる課題を作って調べてみよう。 ・〈課題例〉今と昔の米の種類に違いはあるか。		
児童の思考の流れに沿って探究のサイクルが繰り返されている 課題1 お米の消費を増やす取組を考えよう 稲作が全く無い地域の実態を生かした取組を考える	情報 表現	○話し合いで決まった課題について、グループで分担して情報を収集する。 ○調査結果を表やグラフ等を利用してまとめ、報告会を行う。 ○各グループの報告と自分たちの現状を振り返り、自分たちにできることを考える。	・各組のデータを客観的に整理しデータを根拠に話し合うようにする。その際、整理分析に有効な思考ツールを積極的に利用し整理したことが可視化できるようにする。	
	整理 表現	・私たちの地域は稲作が無いし、学校に栽培できる場所もないから、お米の消費を増やす「おむすび」を考えるのはどうだろうか。 ・学校ファームがあるから、野菜を育てて、野菜を生かしたものを作りたいね。例えば漬け物? ・漬け物だったら自分たちも作れると思う。それで行こう!		

ここでは、児童の思考に沿った学習活動が行われているため、探究のサイクルが[①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析 ④まとめ・表現]の過程ではなく、「①課題 ②整理 ③課題 ④情報 ⑤表現 ⑥整理 ⑦表現」で繰り返されていること、地域の実態に合わ

せた課題が設定できるよう、各グループの報告から自分たちの現状(稲作を全く行っていない地域の実態であること)に児童が気づくよう、教師の導きがあったことも予想できる。

このような学習を経て、お米の消費量を増やす取組を考えようというはじめの課題から、稲作を行っていない地域に住む自分たちにもできるご飯が進む漬物を作ってお米の消費を増やそうという次の課題に児童の意識が自然に流れていったことが予想される。

【本事例の指導計画-3】

お米で広がる ぼくらの世界 第5学年 4～12月 45時間 課題2 ご飯が進む漬物 を作ってお米の消 費を増やそう 4回目の探究のサイ クルでは、課題、情報、 整理、表現の順序通り であるが、探究のサイ クルは必ずしも順序通 りにはならない。 稲作が全く無い地域の 実態を生かした取組と して、米作りから漬物 づくりに活動を広げ	単元の 目標	○学習活動 ・児童の思考 ○話し合いをもとに課題を考える。 「 ご飯が進む漬物 」を作って お米の消費を増やそう	指導上の留意点 ・野菜の切り方や調味料の分量の測り方など、家庭科の調理実習で学んだことを生かせるようにする。 ・児童同士の学習から校内や地域に学習が広げられるようにアドバイスする。	12
	情報 ○どんな漬物にしていくなか考えるために今まで食べたことのある漬物やよく食べられている漬物等を調査する。 ○調査結果を整理し、追究する漬物の野菜や味付け等と学校ファームで栽培する野菜を考える。 ・家庭で出てる漬物やアンケート等で「きゅうり」を使った漬物が一番多かったけど、スーパーでは白菜が多かったかな。でも野菜の種類は結構あったよ。 ・キュウリや白菜、茄子ならこの時期からでも栽培できるみたい。この3つに絞って試行してみたい。 ○野菜や調理法別にグルーピングをし、各グループでどのような漬物を目指すのかを考える。 ○各グループで漬物作りを行う。 整理 ○クラスで試食をするにあたり、審査の基準を考える。 ○各グループの漬物の試食をして、出来栄を話し合う。「味」だけでなく、「野菜の美味しさを生かす」も大切だね。 ・もっと美味しい漬物を作るために「漬物の先生」がいたら、教えてもらいたいね。 ・家近くの漬物を作っているところがあるよ。その人を話で教えてもらおう。			

ここでは、二つめの課題**ご飯が進む漬物**を作って**お米の消費を増やそう**を解決するために、児童が**試行錯誤**していることが読み取れる。「**追究する漬物の野菜や味付け等と学校ファームで栽培する野菜を考える。**」の学習活動からは、一つめの課題設定のときと状況が変わり、学

校ファームでの野菜栽培が可能になったと想像することもできる。また、「**野菜や調理法別にグルーピングをし、各グループでどのような漬物を目指すのか考える。**」という学習活動は、家庭科で学んだ調理実習の経験を活かしていることや、三つめの課題**漬物名人から漬物のコツを学ぼう**に自然につながっていったことも予想できる。児童の思考の流れに沿った探究的な学習活動が行われている。

【本事例の指導計画-4】

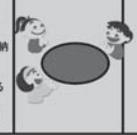
お米で広がる ぼくらの世界 第5学年 4～12月 45時間 課題3 漬物名人から漬 け物づくりのコツ を学ぼう ・体験活動を繰り返して行 くこと ・「体験活動を含めた情報 の収集後は必ず整理 分析活動を行うこと により、課題を更新しなが ら探究的な活動がスパイ ラルに発展していくこと」 に留意して学習を進めてい	単元の 目標	○学習活動 ・児童の思考 ・ 漬物名人から漬物作りのコツを学ぼう ○ゲストティーチャーに 漬物作りの実演と、漬物作りで大切なこと などの話を聞く。 整理 ○ゲストティーチャーから学んだことを整理する。 ・何か特別な調味料を使っている訳ではなかったね。 ・食べてくれる人が美味しいと言ってくれることを大切にしていたから、僕達もそうしたいね。 ・「みんなで協力して作るべきだ」と言っていた。みんながバラバラに作るのもいいけど、みんなで力を合わせて一つの漬物を作りたいな。	指導上の留意点 ・地域で漬物工場を運営されている方に漬物作りだけでなく漬物作りで大切にしていることなど、「技」と「心」の両面で話をしていたくように事前打ち合わせしておく	4
	表現 ・「みんなで協力して作るべきだ」と言っていた。みんながバラバラに作るのもいいけど、みんなで力を合わせて一つの漬物を作りたいな。			

ここでは、三つめの課題を解決するために、地域で漬物工場を運営している専門家をゲストティーチャーとして授業に招待し、その方から学びながら、体験的な活動を繰り返していることを読み取ることができる。また、「教材について」のところが

に授業実践者が記述している『「体験活動を繰り返して行うこと」』『体験活動を含めた情報の収集後は必ず整理・分析活動を行うこと』により、課題を更新しながら探究的な活動がスパラルに発展していくことに留意して学習を進めていく。』の部分にも注目したい。指導上の留意点からは、総合的な学習の時間に行われることの多い、ゲストティーチャーとの打合せの際の留意点（「技」と「心」の両面で話をしていただく）も読み取れる。

この後の学習で、「みんなで力を合わせて一つの漬物を作りたいな。」という児童の願いを生むきっかけともつながっている。ゲストティーチャーから学んだことを活かした四つめの課題**おんリーワンの漬物を作ろう**が自然に生まれている。

[本事例の指導計画-5]

「お米で広がるぼくらの世界」(第5学年) 4~12月 45時間 課題 4 オンリーワンの漬け物を作ろう ・「オンリーワン」のイメージを共有し、漬け物作りの方向性を決めていく。 ・漬け物をつくりながら、問題を解決する活動を繰り返している。	○学習活動・児童の思考 課題 オンリーワンの漬け物を作ろう 整理 ○「オンリーワン」の定義を話し合い、漬け物作りの方向性を決める。 ・「オンリーワン」は「たった一つだけ」という意味だから、使う野菜や作り方も今までにないものがない。 ・みんなが納得すれば今までにないものを使わなくてもいい。 ・漬け物名人に美味しいと言わせることを目標に頑張ろう 情報 ○同じ材料を使って漬け物作りをする。 整理 ○漬け物を試食して更に方向性を絞る。 情報 ○話し合いを生かして、漬け物を作る。 整理 ○ゲストティーチャーに食べてもらう漬け物をどれにするかや、試食会の進め方について話し合う。 ・食べていただく漬け物は一つに絞らないで、みんなが納得したもの全てを食べてもらう。 ・「ご飯に合う漬け物」の視点で食べてもらう。 ・食べていただく漬け物は一つに絞らないで、みんなが納得するまでの道のりもまとめて、お話を聞いてもらう。 ・食べてもらう漬け物のレシピやこれまでの活動行程についての紹介するものを作成する。		指導上の留意点 ・「自分たち」の視点だけでなく「誰もが」という視点を大切にすること。 ・「思いやり・親切」の態度の育成にも意識して学習をすすめるようにする。 15
	表現 ○ゲストティーチャーに食べてもらう漬け物をどれにするかや、試食会の進め方について話し合う。 ・食べていただく漬け物は一つに絞らないで、みんなが納得したもの全てを食べてもらう。 ・「ご飯に合う漬け物」の視点で食べてもらう。 ・食べていただく漬け物は一つに絞らないで、みんなが納得するまでの道のりもまとめて、お話を聞いてもらう。 ・食べてもらう漬け物のレシピやこれまでの活動行程についての紹介するものを作成する。		

ここでは、四つめの課題である「オンリーワンの漬け物を作ろう」の「オンリーワン」のイメージを学級の児童が共有することを授業実践者が大切に扱い、漬け物作りの方向性を決めていくことが読み取れる。また、児童が、課題解決のために生まれた小さな問題解決の活動を繰り返して

いることにも注目したい。更に、「オンリーワンの漬物」という視点は、専門家から学んだことを活かして「自分たちの視点」だけでなく「多くの人々の視点」「誰でもという視点」を大切にしていることも分かる。このことから、「『思いやり・親切』の態度の育成を目指す道徳教育とのつながり」を読み取ることができる。

[本事例の指導計画-6]

お米で広がるぼくらの世界 第5学年 4~12月 45時間 課題 5 漬け物試食会を開こう 課題 6 これからのお米と漬け物への向き合い方を考えよう 「お米に合うとは何か」「自分にとって日本の食はどんな存在か」等の概念に関する問いを定期的に記していくことで、児童個々の学びの深まりを見ていくようにする。 ・はじめの課題に戻る。	○学習活動・児童の思考 課題 漬け物試食会を開こう 表現 ○ゲストティーチャーや保護者を招いて試食会を行う。 情報 整理 ○試食会でのゲストティーチャーのお話や試食会に来ていただいた方のアンケート用紙を集計し、整理する。 ・高い評価のものもあるけど、まだまだという評価もあるね。 ・取り組みへの姿勢についての評価も合っている。 整理 ○これからのお米と漬け物への向き合い方を考えよう 表現 ○単元を通して、自分が学んだことについての考えを持つ。 ○「お米の消費を増やすために自分にできること」について、考えたことや実践できることを表明する。 ・お米は日本の大切な文化だけど、漬け物も日本の大切な文化だと思う。どちらも大切だから、少しでも消費を増やしたり伝えたりしていきたい。		指導上の留意点 ・試食をしていただく方には率直な評価をしてもらおうよう、事前にお願しておく。 4 ・単元を通して学習したことや学んだこと、考えたことを時間をかけて書けるようにする。 2 
	表現 ○ゲストティーチャーや保護者を招いて試食会を行う。 ○試食会でのゲストティーチャーのお話や試食会に来ていただいた方のアンケート用紙を集計し、整理する。 ・高い評価のものもあるけど、まだまだという評価もあるね。 ・取り組みへの姿勢についての評価も合っている。	表現 ○単元を通して、自分が学んだことについての考えを持つ。 ○「お米の消費を増やすために自分にできること」について、考えたことや実践できることを表明する。 ・お米は日本の大切な文化だけど、漬け物も日本の大切な文化だと思う。どちらも大切だから、少しでも消費を増やしたり伝えたりしていきたい。	

児童の探究的な学習活動が連続し、課題は自分たちの開発した「オンリーワンの漬け物」を披露したいという思いにつながっていく。そして、五つめの課題漬物試食会を開こうが自然に生まれ、試食会当日の活動へとつながる。

「総合的な学習の時間」にお

いて3度目の学習指導要領改訂となる今期は、児童が学習した内容(探究課題)に対する概念を形成することを重視している。そのために授業実践者は、「『お米に合うとは何か』『自分にとって日本の食はどんな存在か』等の概念に関する問いを定期的に記していくことで、児童個々の学びの深まりを見ていくようにする。」と「教材について」の中で記している。主体的な学びの視点である「振り返り」を大切に学習活動を計画しているのである。他者評価も取り入れた振り返りや、はじめの課題に戻ることも重要視した振り返りを行って、単元の学習を終了している。

iii) 単元の指導計画を読み取る際のポイント(総合的な学習の時間の特徴を捉える)

本事例は、「探究の過程(スパイラル)を意識して指導を工夫した事例」として、埼玉県小学校

教育課程編成要領「総合的な学習の時間」のページに掲載されている。ここまでの研究から、総合的な学習の時間の特徴を指導計画から読み取る際のポイントについてまとめてみた。

- ・「探究的な学習の過程を総合的な学習の時間の本質と捉え、中心に据える」⁽³⁾ことから、探究の過程が単元の指導計画に記述されているか、探究の過程が記述されていない場合においても、学習活動の記述から探究的な学習の過程を繰り返すことのできる計画になっているかについて読み取ることが重要である。
- ・単元の指導計画に記載されている「探究の過程」と「児童の思考」を、指導者がどのように記述しているか、それらの記述と、学習活動として記述している内容との整合性はあるかに注目し、「小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編」で確認しながら、適切な学習指導が展開できるか否か判断していく。

②「総合的な学習の時間」の理論を具体的に実現しようとしている学習活動の場面や探究的な学習で見出すことのできた児童の姿を捉える授業実践者の実践発表を伺う機会や直接話ができる機会に恵まれた。この筆者の経験を「授業実践者と筆者の対談」という形にまとめ、本事例から得られる指導法の工夫と児童の学習の姿をまとめた。そして、本事例の実践の成果と課題を導いた。

i) 授業実践者との対談（授業実践者を A、筆者を B として記す）

***単元の導入時からハプニングは起きていた……**

B 実践をご発表いただき、ありがとうございました。発表を伺って驚いたのは、単元導入時からハプニングが起きていたということです。米の生長に関わる学習活動の中で生まれた課題を解決していくことが、5年生総合的な学習の時間の年間指導計画に位置付けられている中、「先生、種が腐っています。」「余りの種はありません。」という報告を児童や校内の先生方から聞いたときには、大変でしたね。

A はい。「もうパケツ稲を育てることができない。」と挫折感いっぱいでした。でも、そこでの救いは、米に関するアンケートを児童に実施していたことでした。社会科の学習と関連したグラフの提示も有効でした。児童の答えに立ち戻ったことがよかったです。

B 「児童の答えに立ち戻る。」とはどのようなことですか。

A まず、アンケートから分かったのは、児童があまりお米を食べていないことでした。そこで、日本の米生産や消費に関するグラフを提示しました。そのグラフからは、米の生産が減少することで農家も激減していることが読み取れました。「君たちが30歳ぐらいになったときにどうなっていると思う？」の問いへの児童の答えは明確でした。「このままだと日本の米の生産はなくなってしまう……」という危機感を児童みんなが持ちました。そして「米の生産を増やそう」という課題で学習が始まったのですが……

B 米を育てることに挫折してしまったのですね。

A 米は育たなくても、単元は継続しなければなりません。そこで、もう一度、児童のアンケート

を見直しました。すると、アンケートに「お米と聞いて思い浮かぶものは何か？」という項目があり、それをもう一度、学級全員で分析しました。そのときに児童が注目したのは「おかずよりも梅干しや納豆などの“ご飯のお供”系のことが多いのが意外だね。」ということ、しかも、好きなおかずは洋食や中華なのに、書かれているものは和食のものが多いことにも気づきます。そこで、「これからどうしようか」の教師の問いかけに対して、「ご飯の消費を増やすための取組、ご飯のお供について考えよう。」と意見がまとまったのです。

B なるほど。それで米の消費量を増やすために、ご飯のお供である漬物について考えていく学習が始まったわけですね。ご飯のお供が漬物という考えにまとまったいきさを詳しく教えてください。

A 児童が米の消費量を増やすために取り組みたいご飯のお供の学習は、「納豆」「味噌汁」「漬物」でした。まずはそれらを自分たちで作ってみようということになり、作って試食をしました。しかしながら教師としては、「全部を同時に進められないから、3つの中から一つに絞りたい」と伝え、思考ツールの一つである「メリット・デメリット」で整理・分析活動をしました。すると、漬物については特にデメリットが出てこないという結果になりました。また、「野菜や味付けなどいろいろ工夫ができそう」とか「私たちにもできそう」などの考えが広まり、「漬物」に絞って学習していくことになったのです。

*** 「漬物作りを繰り返すことで、学習が深まるのであろうか？」という授業者の問い**

B 「学習が進まなくなるかもしれない。」というときにも、児童の考えに立ち戻ることが重要ですね。児童の主体性を大切に扱う総合的な学習の時間ならではの、大事な教師の姿勢ですね。

A でも、漬物作りを繰り返すだけでは、児童の視野を広げることはできません。

B 確かにそうですね。活動を繰り返すだけでは、総合的な学習の時間で身に付けたい力がつきません。児童の視野を広げ「よりよく課題を解決し自己の生き方を考えていく。」ことができるようにするために、今後の活動の方向をどのように導いたのですか。

A 漬物作りを普段から行っている校長先生に多くのアドバイスをいただきながら、何度も漬物作りをしては、試食をし合いました。時には先生方に試食をお願いし、感想を求めたりもしました。この段階まで学習が進むと「自分たちの作る漬物がどうやったらおいしくなるか。」という研究のようになっていきました。校長先生や学校評議員の人は、漬物作りの専門家ではありませんが、児童の「漬物研究」へのアドバイスができる経験をお持ちでしたので、授業のゲストティーチャーとしてお招きしました。

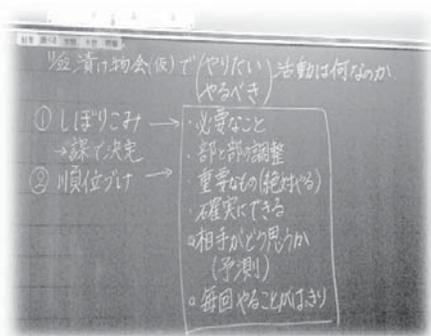
B 「おいしい漬物の研究」をする授業に発展していったのですね。校長先生から学んだことの成果として「どんなもの（洋食、お酒など）に合わせるかで、目指す味の方向性も変わる。」「漬物は各家庭で伝承されていて、それが日本の伝統となっている。」と児童がまとめていますが、この

後の学習活動について教えてください。

- A 校長先生からは、「あなたたちはいったい誰のために漬物を作っているのですか。自分たちが満足して終わってしまうのではもったいない。」と投げかけられました。そのおかげで、児童は、漬物を作る目的を考えることになりました。
- B それで、「みんなで力を合わせる」という新たな目標や「オンリーワンの漬物を作ろう」という新たな課題が生まれたのですね。
- A 「私たちの漬物を多くの人に食べてもらいたい。」という意見も出て、話し合いの結果、「漬物発表会をしたい」ということになりました。

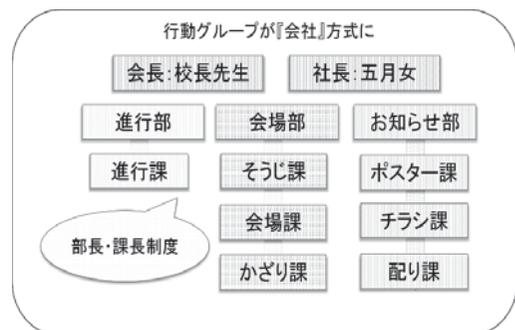
* 「漬物作り研究」から「漬物発表会」という学習の過程で探究的な学習になるのか？

- B 「漬物発表会」とはどのような会だったのですか？また、その前までの準備もどのように行ったのですか？準備ではオンリーワンの漬物を作ろうという課題の解決に向けて15時間かけていますね。
- A 「漬物発表会」は、多くの地域の人も呼びたかったのですが、時間の関係で保護者だけを招待しました。その前の準備でも、児童は試行錯誤していました。教師としては「『漬物発表会』を『やりたい』も大切だが、来てもらう人のことを考えて『やるべき』ことを大切に考えてほしい。」と児童に伝えました。また、仕事が違う友だちからのアドバイスが書いてある付箋を読みながら活動の絞り込みをすること、絞り込んだ活動の優先順位をつけることを活動の方向性として示しました。
- B 先生の板書（資料7）がとても有効だと思います。「相手がどう思うか予測すること」「毎回やることがはっきり」していくことを、児童は毎時間の目標にしていたのではないのでしょうか。ところで、漬物発表会の準備では、児童から「会社みたい。」というつぶやきがあったようです。
- A はい。漬物発表会に向けて必要な仕事を考えているときに児童がつぶやきました。資料8の図



資料7 漬物発表会準備 授業の板書

授業実践者発表資料より



資料8 漬物発表会準備会社組織図

(授業実践者発表資料)

のように、行動グループが会社方式になった形です。部や課ごとにやるべきことは何か活動を絞り込み、絞り込んだ活動の優先順位をつけていきました。活動のために教師が用意したのは（ホワイトボード、白紙、付箋、クリアファイル、ペン箱、座標軸）でしたが、あくまで自分たちで必要な思考ツールを選択できるようにしました。

B 思考ツールは、児童の考えを整理したり児童同士の思いを共有したりするために有効なのですね。

A はい。でも私は、児童が自分たちで思考ツールを選択できるようにしたいと考えていました。はじめは思考ツールをこちらで指定して使い、それぞれのよさを体験させていましたが、途中からは私が指定するまでもなく、必要な思考ツールを選択できました。ですから、児童が手書きで表を作って整理・分析をしていることもありました。

B 思考ツールを使いながら整理・分析活動を進めたことにより、漬物発表会までは順調に準備が進んだのですね。

A いいえ。そんなことはありません。児童同士のイメージが共有できていないと感じたときには、数人の児童があちこちに散らばって話し合いをしていて、結論が出ないまま授業時間が終わってしまったこともありました。また、漬物発表会2週間前に私がリハーサルを提案し、1週間前にリハーサルを行った後に課題がたくさん見つかり、「本番までに解決できるだろうか。」と、児童は不安を感じていました。そんなときにも教師が前に出ず「優先すべき改善点を整理し、少しでも改善できるように活動しよう。」と投げかけ、児童主体の学習活動を進め、本番を迎えました。本番は保護者の笑顔も見られ、大成功だったと児童も喜んでいました。

*本単元を振り返る 目標は達成されたのか……

B ズバリ、本実践の成果をお聞かせください。

A 児童が育ったことです。漬物に対して単元を始めた頃は「しょっぱい」や「ご飯に合う」程度しか書いてなかったのですが、単元の学習を終了したときには、「みんなの気持ちを一緒に漬け込むもの」「作る人によって味が変わる努力の結晶」「協力して何度も失敗を重ねて作るもの」「努力すればするほどいいものになる」といった一見「漬物観」とは分からないような記述が多くなりました。一生懸命活動し、正答のないものに対する答えをここまで導き出し、自分なりの漬物観を持てるようになっていました。

また、総合的な学習の時間を通して「自分で考える力や友だちと一緒に考える力、いろいろな方法（ホワイトボードや付箋）で考える力がついた。」「自分の考えだけを言うのではなく、友だちの考えと折り合える力がついた。」「最後まで頑張る力、一生懸命やる力がついた。」「整理・分析の力がついた。」と答えた児童も多かったです。更に今後の学習に活かせることとして、「インターネットに頼らないで自分で実験したり試したりすること」「思考ツールはいつでも使えそう」「どうした

らよいのかを自分で考えること」をあげていました。

もう一つ付け加えるとしたら、本学級の児童の学力が向上したことも成果としてあげられます。このことについては、今後の経過も見つつ、もう少し分析が必要ですが……。

B 児童に自信をつけた総合的な学習の時間の実践と言えますね。児童が学習を通して変容していることが分かります。

A 総合的な学習の時間における「主体的・対話的で深い学びの充実」を具体的に考えてみたかったので、本実践は、次の3点を目標に展開していきました。

- 1) 児童の思いを課題としてつなげ、ストーリー性がある実践を目指したい。
- 2) 探究の過程における整理・分析の学習活動の充実を目指したい。
- 3) 他者と関わる中で、児童が自分の学びを深められるようにしたい。

この3点の目標は、探究的な学習活動を充実させるための観点から考えました。中でも2点目の目標「整理・分析の学習活動の充実」を重点に考えていました。その理由としては、探究的な学習活動の過程では、課題が発展していく中で自分なりの答えを導き出すことや他者と協働的に課題を解決することが重視されているからです。

B 本実践には、先生の思いがたくさん込められているんですね。「児童の思いを汲み取り児童と共に学習を進め、徐々に児童に任せていく授業」という印象を持ちました。児童が自ら学習活動を進めていく中で、自分事として課題を解決している姿も印象に残り感動しました。ありがとうございました。

ii) 本事例 実践の成果と課題

[本事例 実践の成果1 教師の役割から指導法の工夫を見いだす]

教師がどのような役割を果たしたかに着目して指導法の工夫について考えた。

- ・児童の学習経験や生活経験、児童の気付きの中から課題を見つけ、児童とやりとりする中で課題を設定していった。(導入時にバケツ稲が枯れてしまった後の課題設定や学習活動の方向性を決める時、ご飯のお供を漬物に絞ったとき、漬物研究を発表会として発信するとき)
- ・学習対象を「漬物」に絞るときにも、「三つから一つに絞って」という条件を教師が出してはいるが、その際にも児童の整理・分析の学習活動を通じた結果から、児童全員が納得できるように学習対象を絞っている。逆に言えば、納豆、味噌汁という学習対象を諦めたことにより、「漬物研究」という方向を見いだすことができて、学習を深めることができたとも言える。
- ・「漬物発表会」の準備を進める学習活動の時間には、活動の絞り込みや順位付けが大事であることを、考えるときの視点として示しているので、児童が自ら整理・分析の活動を進めることができている。
- ・児童の学習に対して他者の視点を取り入れる際には、新しい情報を伝える専門家、または、専門家に近い経験や知識のある人から学ぶ学習活動を計画している。

- ・漬物発表会までに2週間となったタイミングで、教師はりハーサルを提案している。漬物の紹介方法に児童が迷っていた際には、「キャッチコピー的にしてみたら」というアドバイスをしている。

[本事例 実践の成果2 児童の姿から見いだす]

目標に対する達成状況や探究的な学習で見いだすことができる児童の姿から考えた。

- ・漬物に対する自分なりの概念形成している。
- ・自分たちが学習対象として選んだ漬物について、試行錯誤しながら調べ、児童にとっての「研究」として学習を進めている。
- ・探究課題「ご飯のお供・漬物」に対して、多面的な視点から繰り返し関わり、課題を発見したり整理・分析したりしている。
- ・単元終了後に「これからの学習に活かしたいこと」「2年生に総合的な学習の時間を教えるとしたら……」の問いに対する答えからは、自己の生き方に関わる記述や総合的な学習の時間の特徴を捉えた記述が見られる。(資料9参照)
- ・感性や問題意識が揺さぶられて、学習活動への取組が真剣になった児童の姿、自分の見方が広がったことを喜び、更なる学習への意欲を高める児童の姿、概念が具体性を増して理解が深まる姿を、実践記録から見いだすことができた。

[本事例 実践後に得られた課題]

- ・「米の消費量を増やすために、漬物作りは有効だと人に勧めることができるか。」という問いに対する学級としての答えをまとめることにより、更によい実践になるのではないか。この問いに対する答えを導くために、更なる整理・分析の活動が始まることも予想できる。
- ・「自分の食生活をどのように考えていくのか。」について考えると、本事例の探究課題に対する自己の生き方を考えることにつながるのではないか。振り返りは、一つの学習活動が終わった時点、一つの課題解決が一応できた時点、単元の学習活動が一応の終わりを迎えた時点等、繰り返し行

資料9 単元の学習終了後のアンケートと児童の答え

(抽出した2問と2問に対する代表的な答え) 授業者発表資料より

質問	「これからの学習に生かしていきたいと思ったことはありますか。」
答え	「インターネットに頼らないで自分で実験したり試したりすること」 「思考ツールはいつでも使えそう」 「どうしたらよいかを自分で考えること」
質問	「もうすぐ3年生になる2年生に『総合的な学習の時間はこんな学習だよ。』と教えてあげるとしたら何といますか?」
答え	「自分たちで課題を決めて、自分たちで進んで話し合いをしていって解決していく楽しい勉強」 「学習の目的や進む道を自分たちで決めて話し合いをし、いろいろなことができる社会性のつく学習」 「自分たちで課題を進めて、みんなで結果に結びつける学習」

うことが効果的なのではないか。

③総合的な学習の時間の学習を質的に高めるための提案

- 〈提案1〉児童が納得する最善解としての課題を設定することが重要である。そのためには、児童とやりとりしながら課題を設定することが重要である。そうすることにより、児童にとっての課題は自分事になり、探究的な学習活動が継続できる。また、課題は個々の児童により違った設定をしていく方が、より「自分事」という意識を高めることができると考えられる。しかし、児童の学習を「主体的・対話的で深い学び」に高めるためには、学級で共通の方向性があり、個々の児童の思いや願いも活かされる課題であることが望ましく、必要な条件である。
- 〈提案2〉「整理・分析活動」の方法等、学習方法を児童に指導し、児童の活動が時間的に厳しいときや児童が次の活動に困ったときにアドバイスをすることが、総合的な学習の時間における重要な教師の役割と言える。できる限り授業の進行を児童に任せ、児童からの積極的な報告を待つようにする。本事例の児童は、教師の役割を「会社の社長、基本的にアドバイザー役、社長に活動したことの報告義務あり。」と決めていた。
- 〈提案3〉授業実践の際には、育成を目指す資質・能力の観点に照らして定めた目標や評価を常に意識しながら授業を組み立てていくことが重要である。学習活動の途中に生まれた課題の解決とともに、はじめの課題に戻っていくことが重要であり、そのことにより児童が「よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えること」につながっていく。そのためには、今回「指導計画」に焦点を当てた分析を進めたが、目標や評価の分析も細かく行うことが重要である。

3 終わりに

研究をまとめた後の後日談をここに記したい。

埼玉県小学校教育課程編成要領に載せた単元計画では、「お米の消費量を増やすために自分ができること」を考える学習活動が単元の最後に計画されている。しかし、発表資料からはそのことが読み取れなかった。その理由を授業実践者に尋ねると、「実践後に再度単元計画を見直し、計画を修正し、編成要領原稿とした。」という答えが返ってきた。つまり、実際には時間的な制約もあり行えなかったが、「本事例の探究課題に関わり、自己の生き方を考えることにもつながる振り返り」について、授業実践者はその必要性に気づき、単元の指導計画を修正していたのだ。

実践後に指導計画を見直し、修正する実践者の省察の姿を感じた。本事例の授業実践者に、改めて敬意を表したい。

教師にとって、指導計画の作成や授業実践は提案である。「こんな児童を育てたい。」「こんな授

業を目指したい。」と明確に意識して取り組むところに、大きな意味を見いだすことができる。

今後、児童の活動が探究的になるためのポイントや総合的な学習の時間の学習活動を質的に高めるための方策を、他の実践からも探り、研究を深めていきたい。

付記

※本文に掲載した資料1～6は、授業実践者作成の指導計画部分を筆者が加筆し作成した。

※資料7は、授業実践者の実践発表資料（2018.2.13 埼玉大学教育学部附属小学校にて開催された「埼玉県生活科・総合的な学習の時間教育研究会理事研修会資料」）から引用した。

※資料8・9は、授業実践者の実践発表資料（2019.11.8 茨城県ひたちなか市ホテルクリスタルパレスにて開催された「令和元年度第21回関東地区小学校生活科・総合的な学習の時間教育研究協議会 茨城大会 課題別分科会資料」）から引用した。

本稿をまとめるにあたり、授業実践者の 現 富士見市立南畑小学校(前 所沢市立安松小学校) 五月女 竜也 先生に多大なるご協力をいただきました。深く感謝し、お礼申し上げます。

(注)

- (1) 埼玉県小学校教育課程編成要領 埼玉県教育委員会 平成30年3月 p.p.198-199.
- (2) 小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説総合的な学習の時間編 文部科学省 p.111.
小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説総合的な学習の時間編 文部科学省 p.9.
- (3) 小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説総合的な学習の時間編 文部科学省 p.111.
- (4) 小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説総合的な学習の時間編 文部科学省 p.111.
- (5) 小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説総合的な学習の時間編 文部科学省 p.p.114-115.

Considering Comprehensive Instruction in Elementary School: An Analysis of Lesson Plans to Inform Better Practice

Keiko ISHIBASHI

Abstract

This paper represents a collection of notes that highlight comprehensive education in elementary schools. The subject of instructional methodology for comprehensive studies is attracting increasing attention in teacher licensing programs and becoming a more focal aspect of the curriculum. However, it cannot be asserted that instructional methodology is presently firmly grounded in elementary schools. This study thus undertook the task of identifying the specific characteristics of the instructional methodology for comprehensive studies by analyzing and describing superior lesson plans.

The present paper also introduces materials and reflections from the discourse of academic fora to more comprehensively contemplate the intersections between the theory and practices of instruction.

Key words: practice of elementary school comprehensive study time, unit instruction plan, characteristics aimed at elementary school comprehensive study time, measures to connect theory and practice